

「Q-U」結果の解釈と活用について① 再掲 (2004年7月財団法人応用教育研究所発行 応研レポートNO.70 より)

1 調査法による児童理解の必要性

教師の意図したかかわりとその児童の受け止め方、教師から見た児童の実態と彼らの内面には、必ずギャップがある。それを忘れる、「私はAという内容の育成をめざして、児童を指導したつもりだ」ということが、「Aという指導を児童は受けた」と飛躍して認識してしまう。「普通の生徒が突然暴れた」というのも、教師には普通に見えただけなのかもしれない。このギャップに教育実践上の盲点が生じる。児童が変わってきて従来のように教育実践が展開できない、最近の児童は何を考えているのかわからないと嘆くのは、このギャップが大きいからである。

●実践するために理解したいこと

教師が教育実践に調査法から得た資料を活用するためには、①児童の個々の特性・心情面②学級集団の実態③教師の指導をどうとらえているかの三点の把握が必要である。そして、**①と②はつねに統合して理解していくことが大事である。**つまり、個人、学級集団、個人と学級集団の関係の三つの側面からの理解である。「一対一で話すと素直なのに、集団の中にいると反抗的なのよね」という教師の嘆きは、①と②を統合して、特定の場面における児童の行動や態度を理解しようとしている教師の力不足にほかならない。

2 実践に活用できる尺度とは

本調査は、把握したい三つの視点の①と②が同時に理解でき、かつ実践に活用しやすい尺度を用いている。「たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U」である。

本尺度は、「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」と「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の二つからなる。二つの尺度は、児童個々の理解だけではなく、指定された図表の中に学級の児童一人ひとりをプロットすることにより、学級集団の全体像を把握できる。つまり、**個人、学級集団、学級集団と個人の関係、の三つの側面の理解が同時にできる。**

3 「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」の内容と活用方法

学級集団が児童にとっていごこちのよい居場所になれば、学級集団への適応感が高まるだけでなく、諸々の活動に主体的に取り組む意欲につながる。児童が所属する学級集団をいごこちがよい感じるのは、**(1) トラブルやいじめなどの不安がなくリラックスできている。(2) 自分が級友から受け入れられ、考え方や感情が大切にされていると感じられる。**という二つが満たされたときである。

この二つの視点（被侵害得点、承認得点）を座標軸にして、児童を四つのタイプに分けて理解するのである。

- ① 被侵害得点が低く、承認得点が高い児童は、学級内に自分の居場所をもち、学級生活や諸々の活動を意欲的に送っていると考えられる **【学校生活満足群】**。
- ② 被侵害得点と承認得点がともに低い児童は、不安となる出来事もいかわりに学級内で認められることもなく、学級生活や諸々の活動に意欲が見られない。教師にとっても注目することが少ない児童であろう **【非承認群】**。
 - この群の児童には、彼らが級友から認められるような場面設定の工夫や、教師は君を見守っているよというメッセージとして言葉かけを意識して多くする必要がある。この群の児童は学習の定着が低い場合が多く、学習面からの対応も考えなくてはならない。

「Q－U」結果の解釈と活用について② 再掲 (2004年7月財団法人応用教育研究所発行 応研レポートNO.70より)

- ① 被侵害得点と承認得点がともに高い児童は、学級生活や諸々の活動に意欲的に取り組むが、そのプロセスでトラブルが生じてしまうことが多い【侵害行為認知群】。いじめを受けている場合も考えられるが、本人にも自己中心的な面がある場合が多い。
→ 単にその出来事の白黒をつけて指導するのではなく、どういう理由でトラブルになったのか、その時のお互いの感情はどうだったのかとい点を、時間をとって考えさせが必要である。他人の気持ちを考える視点や社会性を育成するのである。
- ② 被侵害得点が高く、承認得点が低い児童は、耐えがたいいじめ被害や悪ふざけを受けている可能性が高い。また、本人が非常に不安 傾向が強い場合も考えられる。どちらにしても学級集団への適応感は低く、不登校に至る可能性が高い【学級生活不満足群】。
→ この群の児童には個別の面接が早急に必要であり、具体的な対応を計画的に行っていくことが求められる。

4 「やる気のある学級を作るためのアンケート」の内容と活用方法

本尺度は児童の学校生活（学級生活）における意欲や充実感（スクール・モラール）を測定するものである。測定する領域は、小学生用は「友人との関係」「学習意欲」「学級との関係」の三つの領域である。各領域の児童の得点を指定された図表に記入すると、児童個々の学校生活意欲の高さと、領域による偏りを理解できる。個人内評価が可能なので、教師は児童個々について、配慮や意識的なかかわりが必要となる領域を把握できる。さらに、学級の児童全体の各領域の得点や総合得点を整理すると、その学級全体の状態が把握できる。授業や諸活動を展開する上で、提示の方法や学習形態など工夫すべきことが示唆される。

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の各領域の得点と、「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」の承認得点と被侵害得点とは、相関が高い。したがって、併用して活用することにより、児童個々や学級集団の理解がより深まり、教師の具体的な対策が見えてくる。たとえば、B組全体の承認得点が高いのは、学級内の友だちとの関係がよいからである。仲のよい友だちがいない生徒たちは、疎外感をより感じるだろう。したがって、学級内の友だち関係が固定せず拡大するような対応が、必要である、という具合である。

この二つの尺度の結果は、知能のように変動が少ないものではなく、児童が学校生活を送っていく中で変化していく。したがって教師は、定期的に実施することにより、タイムリーな対応ができる。さらに、児童個人の変容や学級集団が全体としてどのような方向に形成されていくのかが推測できるので、個人や学級集団に計画的に対応できる。そして、学級集団へのかかわりを通して、児童個々に対応する方法も示唆されるのである。

おわりに

自分の教育実践を勘や経験則のみに頼っている教師は、問題が生じた場合、自分や児童を必要以上に責めてしまう。とくに、自分は力の無い教師なのではないかと、自分を否定的に考えてしまう。調査法の活用は、教師に自分の教育実践を分析的に見るという態度を形成する。したがって、問題が生じた場合でも、修正すべきポイントに対応すればよいと考え、自分を否定するような極端な思考には陥らない。問題を客観的にとらえて、建設的に対応できるのである。つまり、教師が自分の心の健康を保つ方法としても、調査法の活用は有効なのである。

「Q-U」の分析・活用

BIGLOBEウェブリブログより

学級経営に生かすQ-U（早稲田大学 河村茂雄先生のお話より）

2005年～2006年、Q-U開発から10年目、Q-UをリニューアルしたhyperQ-Uの開発も兼ね、早稲田大学 河村茂雄先生は、大規模な調査研究を行いました。その数のべ5万人。10年前とは違う学級の姿が見えてきました。（図書文化社「データが語る学校の課題」）

10年前とはQ-Uのヒット率が違う！？

Q-Uは、自分で考え行動できる子どもがほとんどのクラスでは、当てはまりません。ですが、このヒット率が10年前と比べて上昇しているそうです。それはなぜか…

それは、周りに流されやすい子どもが増えているということです。ということは、崩れ始める前（夏休み前）の段階でいかにクラスの型に合った対応ができるかということです。

毎年のクラス替えって…

小学校ではなれ合い型が増え、子ども同士の人間関係がうまく作れない現状があります。そのため毎年クラス替えを行うということは、子ども同士が周りとの人間関係をうまく作れないまま大人になってしまうという危険性があります。1年間で人間関係をうまく作っていくのか、何年かかけてじっくり人間関係の作り方を教えていくのか…毎年のクラス替えは対処療法にすぎません。

都会と地方の差

不満足群に70%の子どもが入ると、学級崩壊になります。都会と地方で、このスピードが違います。荒れ始め型になったとき、都会では一気に崩壊に進みます。しかし、地方ではそのスピードが緩やかです。都会では荒れ始め型になったときには手の打ちようもないことが多いですが、地方では何とかくい止めながら学年末を迎えるところもあります。

小学校はなれ合い型が多い

10年前、いじめ自殺や不登校の増加から管理型の指導がやり玉に挙がりました。そのため、教員研修の中にカウンセリングが多く取り入れるようになりました。その結果どういうことが起こったか…。**教員は子ども一人一人との人間関係作りを重視するようになり、子ども同士の人間関係づくりが十分に行われなくなりました。**そのため、小学校ではなれ合い型が多くなったのです。（中学校はまだ管理型が多いそうです）

複雑化するなれ合い型のいじめ

なれ合い型は教師と子どもが1対1でつながっているため、子ども同士のつながりが育っていません。そのため、「ひとりぼっちになりたくない」という不安感から、小グループが乱立します。小グループ内では、つながりを保とうと、共通の敵をもったり反社会的な秘密を共有しようとしたりします。これがいじめや非行につながります。また、人間関係の希薄さから、些細なことでグループ内でのいじめも発生します。**教室内にルールがないため、何を言っても許される環境にある子どもたちの間には、小グループ同士の対立やグループに入れないと子の排除が始まります。**それは陰口・中傷、ネット攻撃など顕在化しにくいものとして現れてきます。

自主性が育たない管理型となれ合い型

管理型では教師が強い指導を行うため、子どもたちは教師の言ったことしかしようとしなくなります。また、なれ合い型では教師と子どもが友達関係にあるため、「次に何するの？」「これやってね」とその都度教師に聞いてくる子どもになります。

Hyper Q-U

従来の「学校生活意欲」「満足度尺度」に加えて、「ソーシャルスキル尺度」が加わったものです。ソーシャルスキル尺度は「配慮」と「関わり」のスキルという対人関係力を測定します。オールコンピューター診断で、個人票が付きます。また、NRTと知能検査の相関も一緒に出力することができます。これにより、集団と個人の両側面から細かな診断を行うことができます。

特別支援教育元年は学級経営元年

特別な支援を必要としている子どもの満足度は低い傾向にあります。ですが、高い満足度をもつた子どもたちもいます。それは、どんな子どもたちか。満足型の学級にいる子どもたちは比較的満足度も高くなります。**お互いに認めあえる集団が、発達障害の子どもも支えられるのです。**

集団が作れない子、参加できない子は何も発達障害の子どもだけではありません。定期的なチェックとこまめな修正がこれから学級経営に求められています。